

スラムの学校＝ジャグリティ： 識字教育から共生の教育へ

永田 佳之

はじめに

発展途上国の教育問題のひとつに、学校教育を受けられない子どもたちが少なからず存在することがあげられる。例えば、インドの大都市オールド・デリーでは、約130万人の人々がスラムで暮らしている。彼（女）らにとって、自分の子どもを学校におくる余裕はない。

スラムの子どもたちが学校に通えない第一要因として貧困が指摘される。貧困であるがゆえに、子どもたちは家事手伝いや路上での労働に従事してはならない。学校に通えない結果、基礎的な読み書き計算ができず、成人しても安定した職に就くこともできない。したがって、収入が少なく、スラムや路上で貧困生活をおくることを余儀なくさせられる、という「貧困のサイクル」の社会構造の中にスラムの人々は組み込まれているのである¹。

この悪循環を断ち切り、スラムの人々を解放するために、教育の機会をスラムの子どもたちに授け、社会で自立した大人になるよう活動を続けている

¹ チェンバースは、貧困のサイクルを「窮乏化の罫」としてとらえ、①政治力や交渉力のなさ、②不測の事態に対する脆弱さ、③身体的弱さ、④物質的貧困、⑤孤立化、という五つの要素が相互に作用し、ひとつの悪循環を生み出していることを示している（ロバート・チェンバース、1995年：第5章）。

団体がある²。この小論では、デリーのスラムで活動が続いている「ストリート・サバイバーズ・インディア」(以下‘SSI’)と呼ばれるNGOの学校、「ジャグリティ・スクール」(以下「ジャグリティ」)の活動を紹介した上で、そこで営まれる教育について考えてみたい。

1. ストリート・チルドレンとジャグリティ

デリーには、1,200~1,300万人の人々が暮らし、その3分の1がスラム居住者といわれる。周知のとおり、スラムの住環境は決して好ましいものではない。後述するモティア・カーン・スラムのように、デリーのスラムの中には1平方キロメートルの場所に3万人ほどがひしめいて暮らしているところもある。彼らの多くは、農村での生活が貧窮を極めるため、貧困生活から脱し、都市で何らかの仕事に就く、という「豊かさ」を夢見てやってきた人々である³。しかしながら、資格もなく、基礎的な字の読み書きすらできない彼(女)らを待ち受けている現実決して容易いものではなく、安定した働き口はほとんど見つからない。その結果、建築現場のレンガ運びやリキシャー引き、靴磨きなどの肉体労働者になったり、物乞いになったりする者も少なくない。さらなる問題は、彼(女)らの多くは家族もろとも都市に移住して

² すでに日本でも知られる、スラムでの教育活動を展開するNGOとしては、例えば、タイのクロントイ・スラムで活動しているプラティープ財団が挙げられる(曹洞宗ボランティア会、1987年)。また、スラムの子どもたちの問題を扱った最近の作品に関しては、萩原康生編著『アジアの子どもと女性の社会学』(明石書店、1996年)、マリー=フランツ・ボツ『子どものねだん：バンコク児童売春地獄の四年間』(社会評論社、1997年)、M・R・P・バレスカス『フィリピンの子どもたちはなぜ働くのか』(明石書店、1997[1991]年)、ピーター・リーライト『子どもを喰う世界』(晶文社、1996[1995]年)、「ストップ子ども買春」の会編『アジアの舐まれる子ども』(明石書店、1996年)等が挙げられる。

³ この経緯については、仏印合作映画『サラーム・ボンベイ』(ミラー・ナーイル監督)に詳しい(Nair, Mira, dir. *Salaam Bombay!* Film Four International. 1988. 116 min.)。また、アジアで作成された、スラムの子どもを題材にした映画としてはインドネシア映画『青空がぼくの家』(スラメット・ラハルジョ・ジャロット監督、1989年)がある。

きており、少なからぬ子どもを抱えているということである。

デリーには、約50万人のストリート・チルドレンが暮らし、うち10万人は家出をしたり、親とはぐれたりした「家なき子」であるといわれる。彼（女）らの中には、自分の親に連れられてきたわけではなく、ただ「豊かな都会」往きの貨物車に乗り込み、真夜中のニューデリー駅にたどり着いた子どもたちが少なくない。結核や梅毒、エイズなどの病に苦しみながら路上で生活し続ける子どももいる。

SSIの創設者のひとりであるシャブナム・ラマスワミ氏は、デリー駅周辺で物乞いなどをして生活する子どもたちとの出会いがきっかけで、彼（女）らを対象とした教育・福祉活動をはじめた。当初は、授業を行う場所もなかったため、デリー駅構内のプラットホームでストリート・チルドレンを対象に読み書きを教えたりしていた。その後、デリー駅近くの「モティア・カーン」と呼ばれるスラム地区内に小さな教室と遊び場が確保できるくらいの空き地が見つかり、スラム住民と交渉してスラムの中に活動の拠点がもてるようになった。1990年のことである。そこでSSIはスラムの家庭を訪問調査し、第一期生として25人の子どもたちが迎えられた。同時に、彼（女）らは空き地に手作りの^{まなびや}学舎を建てた。その入り口には、ストリート・チルドレンが社会的に目覚め、自立して運命を切り拓いてゆけるように、との願いを込め、ヒンディー語で「目覚め」を意味する「ジャグリティ」と記された小さな看板が掲げられた。スラムの中の小さな学校のはじまりである。

2. ジャグリティの一日

設立当初は1クラスしかなかったジャグリティであるが、毎年1クラスずつ増え、現在では約300人の子どもたちが、初級（就学前）1クラス、第1学年2クラス、第2～5学年各々1クラスの計7クラスに分かれて学んでいる。学舎や敷地の広さ、そして職員数に比べて生徒数が増えたので、全生徒を午前組と午後組とに分け、二部制で授業を行う。

ここでジャグリティの一日を簡単に紹介したい。

朝8時すぎ、スラムの子どもたちがどこからか学校のある空き地に集まってくる。ある程度の人数がそろると、全員整列し、教師が打つ太鼓の音に合わせて体操がはじまる。続いてインド国歌などを数曲歌う。どの子どもも空腹だとは思えないほど、元気に声を張り上げて歌う。こうした朝礼が15分ほど続いた後、生徒たちは木と竹でできた手作りの「寺子屋」の中に入り、ロッカーから教科書とノート、鉛筆を取り出す。そしてクラスごとに3～4か所に別れ、地べたにすわって先生を囲む。

子どもたちが各グループに分かれると、狭い教室はたちまち教師の声やヒンディー語を斉読する子どもたちの声が雑然と響きわたる空間となる。識字クラスでは読み書きのみならず、基礎的な算数（ニューメラシー）も習う。1時間60分の授業は月曜日から土曜日まで毎日行われる。ヒンディー語の識字クラスの他に、ディスカッションの時間（自分たちを取り囲む社会に対する意識化（social awareness）の授業）が設けられることもある。上級に進んだ子どもを対象に、環境学習や地理・歴史なども用意されている。他の科目としては、粘土細工、絵描き、後述する演劇や踊りなどもある。

また、課外活動としては、図書館での読書プログラムがある。午後、SSIの職員が数名の上級生に付き添い、デリー市内の児童図書館で読書の機会を提供するプログラムである⁴。現在では、住所の確定しないスラムの子どもたちも特別に登録されるようになり、毎回ひとり数冊の本を借りることができる。

午後には、読書プログラムのみならず、演劇や踊りの練習に参加する子どもたちもいる。表現活動における子どもたちの真剣な眼差しと練習に対する

⁴ 1992年、世界寺子屋運動（日本ユネスコ協会連盟）のモニタリング調査活動の一環として、筆者がSSIを訪れた際、この読書プログラムに参加する機会に恵まれ、上級生らと共にデリー市内の児童図書館を訪問した。身なりが汚いという理由で入り口で門前払いされるという一幕もあったが、SSIの職員が図書館長らに話をした結果、入館することができ、さらに子どもたちの名前を登録リストに載せ、本を借りられるまでになった。

ひたむきな姿勢はジャーナリストの目を引き、イギリスのテレビ番組でも特集として扱われたこともある。しかし、貧困生活にあえぐ家庭の貴重な労働力である子どもたちには学習活動に費やせるだけの自由な時間はそれほどない。たいていの子どもたちは、昼過ぎ、または夕刻から路上や駅周辺で物売りなどの労働や家事手伝いに勤しまなくてはならない。なかには夜遅くまで働く子どもも少なくなく、かつては性的虐待等を受けた子どももいた。

現在、ジャングリティの生徒には、安全な生活がおくれるよう様々な配慮がなされている。警察に不当に逮捕されないように生徒一人ひとりにIDカードが与えられ、「家なき子」もSSIが用意した宿泊施設^{シェルター}で仲間と共に寝泊まりできるようになった。

3. 公教育に対するオルターナティブ

ジャグリティの子どもたちは公教育を享受できない立場におかれている。理由はいくつかあるが、第一に、親がいる子どもでも家族の所得がきわめて低いと、学用品や制服などの学校教育にかかる諸費用が十分に賄えないことが挙げられる。第二に、一般の学校教育が要請する規範とスラムや路上で暮らす子どもたちの生活パターンとは相容れないことが指摘できる⁵。前述のとおり、こうした子どもたちの一日の大半は、育児を含めた家事手伝いやデリー駅周辺での物売りによって占められ、学校での勉学に十分な時間や労力を費やす余裕はまったくない。スラムで暮らす彼（女）らの親には、子どもといえども労働力となって家計の一助となることがなによりも先決で、読み書き算数は二の次と考える者もいれば、教育の必要性すら感じない者も少なくない。

⁵ I・エプスタインは、ストリート・チルドレンの文化の特異性について述べ、その文化は、国家の教育システムが有する価値体系とは相容れないものであることを指摘している (Irving Epstein 1996: pp. 289-302.)。

このような事態に対して、政府の態度は、少なくとも表面的には無関心な場合が多かった⁶。50万人ともいわれるストリート・チルドレンが様々な問題に日々直面していることが自明であるにもかかわらず、特別に彼（女）らのためのプログラムづくりなどに着手したわけではない。また、ラマスワミ氏が「正規の学校では、ストリート・チルドレンは学校にきたくても1日数時間くらいしか勉強できず、他の時間は自分自身の責任として働かなければならないということをなかなか理解してもらえない」（日本ユネスコ協会連盟 1995：41）というように、一般に、学校関係者は都市の児童問題に対してあまりに無理解であった。それどころか、学校は、公教育を享受できるものできない者との格差を広げる機能を果たしてきたとさえいえよう。

こうした状況の中で、スラムで暮らす人々のような不利益集団に対して、規制にとらわれない自由なアプローチを駆使して効果的な活動を展開しているのが、NGOである。ジャグリティの場合も、「パーソナルでノンフォーマル」な手法が公教育を享受できない子どもたちに学習の機会を提供している。

一般の学校とは対照的に、ストリート・チルドレンが学習と労働とを両立できる順境がジャグリティにはある。ジャグリティのカリキュラムは子どもたちの貴重な労働時間をも周到に配慮してつくられている。

基礎学習の時間（4時間）はすべて、午前か午後の半日の中で組まれているので、子どもたちは靴磨きや物売りなどの「仕事」に残りの半日は勤しむことが可能となる。しかも昼には栄養価の高い給食が支給されるので、多くのストリート・チルドレンのように仕事中、空腹にさいなまれることもない。

⁶ インド政府は、成人教育については、ナショナル・キャンペーンを実施するなど、積極的な姿勢を示してきたが、ストリート・チルドレンの教育問題に関しては、児童労働法に着手したり、限られたNGOを通じた支金援助を行うなどの間接的関与に止まっておき、概して消極的であったといえよう。ジャグリティの場合も、たとえ政府が関心を示したことはあったにしても、それはデリー駅近辺の開発のための立ち退きを要求する際でしかなかった。ストリート・チルドレンに対する政府機関による取り組みの問題性については『ストリートチルドレン：都市が生んだ小さな犠牲者たち』（緒方貞子監修、草土文化、1988年、79-100頁）を参照。

既述のとおり、家族と一緒に暮らしていないストリート・チルドレンに対しては、夜間寝泊まりが可能で、安全な宿泊施設が新しい学舎の二階や「職場」である駅のすぐ側に設けられている⁷。学舎の二階では毎晩数十人の家のない子どもたちが寝泊まりしており、朝大忙しで教室づくりをする。

身なりについては、一般の学校のように制服を購入する必要もなく、たとえば粗末で汚れた服装をしていても自他ともに気にする必要などない。

健康管理についても様々な配慮が行き届いている。開校当時はバナナ一本とパン一斤だけであった給食も、現在では日本からの支援により鶏肉、野菜、米、ヨーグルト、果物、卵などを使った栄養価の高い給食のメニューが用意されている。スラムの子どもに多い栄養失調などの問題に対しても、経験と理解に基づいた処置をとることができる。病院で治療を受けられるストリート・チルドレンは皆無に等しいが、ジャグリティでは病気の子どもたちをまとめて病院に連れていき、診察を受けさせることもある。

スラムでは比較的大家族が多いが、母親が外に働きに出るときは、年長の女子が幼少の弟や妹の面倒をみなくてはならないので、学校に行く余裕など到底ない。たとえ面倒をみる子がひとりだとしても、学校に年少児をつれていくわけにはいかない。しかしジャグリティでは、母親が働きに出ている間、幼い妹や弟を学校に連れて登校することが許可されている。ジャグリティを訪れると、幼い妹をおんぶ紐で背負いながら学ぶ少女や、学舎で読み書きを習う年長児の側でひとり遊びにふけている幼児を目にする。

⁷ コミュニティ・センターとして使用されている建物を、1994年1月から平日は午後7時から翌朝まで、休日は一日中、ストリート・チルドレンのシェルターとしてSSIが借りている。このシェルター・プログラムを運営するのは、かつてのストリート・チルドレンで13年間路上生活の経験があるモハド・イスタハ氏である。子どもたちの病気の世話、貯金管理、健康管理、夜間学校の補助教師をつとめるモハド氏は、後述する「連帯」や「共生」の生き方を体現する好例といえよう（日本ユネスコ協会連盟制作ビデオ『私たちの生活・私たちの学校』インド編、参照）。

4. 「道具」としての識字

教育開発の文脈において、しばしば説得力をもつのが、識字率である。今世紀、識字率は国家の発展の度合いを計るメルクマールのひとつとして、GNPなどと共に使われてきた。「低識字率＝途上国＝貧困」状態から「高識字率＝先進国＝豊かさ」へ、という先進国への発展モデルに則り、多くの国々が非識字の撲滅に尽力してきたのである。国家の威信を懸けて識字率の向上のため、識字運動をナショナル・キャンペーンとして一斉に展開した国々も少なくない。1990年には、「万人のための教育」宣言⁸に基づき、成人非識字率を1990年の世界平均の25%、途上国平均の34%からそれぞれ半分に低下させることが中期目標として掲げられ、その目標に向かって国や地域レベルで様々な識字教育活動が実施されてきた。

このようにして現在でも、教育計画や政策を策定するさい、識字率という数値目標が、大きな影響力をもつわけであるが、ジャグリティの識字教育は、これらの趨勢から一定の距離をおいてきたように思われる。

ラマスワミ氏は「識字そのものは、ノンフォーマル教育のストラテジーの小さな構成要素にしかすぎない」(SSI-A Profile) と言い切る。つまり、識字教育は、生活の糧を得て、尊厳をもって生きていくための戦いに必要な術^{すべ}なのであり、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。ラマスワミ氏にとって、読み書きができるようになったか否かはさして重要な問題ではない。むしろ問題となるのは、読み書き能力をもって自分や自分を取り囲む現実がどう変わったのかなのである。こうした教育観の基底には、数値化されえないものを見据える視座、つまり社会的弱者の至福に対するリアルな眼差しを見て取ることができる。

ラマスワミ氏は、1995年の「第51回日本ユネスコ運動全国大会『共生を

⁸ 1990年、タイのジョムティエンで開催された国際会議「万人のための教育世界会議」で採択された宣言。1990年代の途上国の教育政策策定や先進国の教育援助計画などに大きなインパクトをもたらした。

めざす市民のつどい』のシンポジウムで次のように語った。

識字には限界があるということを確認していただきたいと思います。(中略) 文字を識るといろいろな魔法ができるようになってしまいがちです。読むことを学べる、書くことを学べる、コミュニケーションもとれるようになる、それからお金を数えることもできる、手紙を書いたり、署名もできる、しかし、それだけでは充分ではないんです。(中略) 貧しい労働者は職場に行って、下請け業者のもとで日当をもらって働きます。ところがそのお金が数えられるからといって、労働者の権利がきちんと守られるわけではありません。お金が数えられても、もらう金が安ければ戦わなくてはならない。戦うためには識字以上のものが必要です。一緒に働いている人々と手を結ぶことが必要です。私どものように、外国の人々との連帯も必要かもしれません⁹。そうしてはじめて、その労働者もその家族もよい稼ぎが得られるのです。識字だけではそうはなりません。そのことがお分かりいただけますと、識字というものは第一歩にすぎないということ、教育の過程の、ひとつのプロジェクト建設の過程での第一歩にすぎないということがお分かりいただけるでしょう(日本ユネスコ協会連盟1995:41、傍点筆者)。

ラマスワミ氏夫妻は上の引用中の「識字以上のもの」の重要性を識字教育関連の国際会議でことさら強調する。「世界寺子屋運動第二回識字教育振興会議」(1993年)では、世界の識字教育の第一線で活動するリソース・パースンや実践者を前に、ラマスワミ氏はみずからの経験を踏まえて、識字教育にかかわる根本的な問題提起を行った。発言の主旨をまとめると、次のようになる(NFUAJ 1993:18)。

① 非識字そのものが解決すべき問題なのか。それとも、非識字は社会の

⁹ ラマスワミ氏の教育活動は、1994年度の世界寺子屋運動学校キャンペーンの支援先選ばれ、日本の民間運動の協力を得ている(『私たちの生活・私たちの学校』参照)。

不平等に対する表現にすぎないのか。

- ② 識字教育を施したからといって、生活の質の改善は自動的に保証されないし、学習者がみずからの社会における不平等と搾取を理解し、戦うようになるわけではない。
- ③ とすれば、識字は教育という営みのための「道具」（一手段）であり、教育の代替物ではない。
- ④ もし識字そのものがあたかも目標であるかのごとく私たちが誤認すれば、教育者としてのみずからの使命を全うすることはできないのである。

上の文言は多分に挑発的であり、識字の道具的な一側面を強調しすぎる傾向を指摘されるかもしれない。しかし、こうした見解は、非識字率の低下という数値を掲げ、それを達成すること自体が目的であるかのごとくスローガンが掲げられる国際会議の「落とし穴」に対する警鐘であるといえよう¹⁰。

ラマスワミ氏のステートメントは、読み書き能力を身につけるといふ教育の実務的機能を越えたところにある人間の目的的な価値を見据えた上での発言である。教育の目標は、3Rsの向こう側にあるのではないか——SSIの実践はこのような根元的な問いかけを私たちに示しているといえよう。

では上記③の、ラマスワミ氏が識字教育の向こう側に想い描く「教育」とは、どのようなものであろうか。SSIの識字教育は教育の目的ではなく道具、つまり手段として位置づけられるのであれば、彼らの教育目的とは何なのか。この点について、ラマスワミ氏はこう語る。

読み書きができるからといって、それだけで適切な行動が誰でもとれる、

¹⁰ こうしたラマスワミ氏の見解に対して、ユネスコ本部職員であり、かつてEWLP (Experimental World Literacy Programme) にも関わったことのあるA・ジレット氏から、現実の世界を変えていくためのスローガンの必要性も上記会議で主張された(NFUAI 1993 : pp.30-31)。

いつでもとれるというわけではありません。他者の問題に献身する、他の人々と連帯して何かをやる、自己犠牲をしてでもよりよい世界を築いていこうとするとは残念ながら限らないのです（日本ユネスコ協会連盟 1995：39）。

この言葉から判断すると、ラマスワミ氏にとっての教育目的とは、「よりよい世界を築いていこう」とするための「連帯」だということが分かる。

さらに氏は、教育者の仕事について次のように語る。「教科書中心のお勉強は、ストリート・チルドレンにとって何も意味しません。そこで教育者の仕事とは、ストリート・チルドレンの目を通して外の世界を見つつ、このような（不正に満ちた、みずからが置かれている環境を認識させる）教育に従事すること」となるのである（NFUAJ 1993：18）。SSIの教育目的は、みずからがおかれている世界をストリート・チルドレンが認識し、その上で、その改革に向けて他者と協働して生きていくことができるように導くことなのである¹¹。

ジャグリティの教育活動で、こうした教育観をもっとも如実に反映しているのが授業の中での問答（ディスカッション）であり、演劇（ストリート・パフォーマンス）である。

5. 方法としての問答——ディスカッションを通じた意識化のプロセス

ジャグリティの授業の特徴は、授業方法として問答形式のディスカッションをふんだんに取り入れていることである。子どもたちは、読み書き技能の

¹¹ こうしたラマスワミ氏の教育観は、人間として生きるということは、他者（世界）との関わり合いを引き受けるということであると述べ、現実世界との主体的な関わりを重視するP・フレイレの教育観とも相通じるといえよう（P・フレイレ『被抑圧者の教育学』）。

¹² 『私たちの生活・私たちの学校』の一場面より引用。

習得のみならず、自分の考えをしっかりと表現できるように教わる。

授業でのディスカッションは年少児、年長児を問わず、闊達である。ここに一例をあげたい¹²。

[前 略]

先 生：「人間が欲張りでなくなったら、どんなことが起こる？」

生 徒A：「子どもたちはゴミ拾いに行かなくていいし、誰も物乞いをしたり、路上で生活したりしなくてすみます。」

生 徒B：「みんなが勉強できるようになります。」

先 生：「では、今の状況はどうですか？」

生 徒C：「学校に通えるのは、恵まれた子どもたちだけです。」

先 生：「インドには全員が通えるだけの学校がありますか？」

生徒全員：「ありませーん。」

生 徒D：「ジャグリティができる前は、親が私たちを大きな学校に連れていっても、学校はきまって、こんなに汚い子どもの入学は認めないといひ、1,000ルピーとか2,000ルピーもの大金を要求しました。そんなお金をどうやって手に入れるの？それにどうにか払ったとしても食べていけなくなってしまいます。」

先 生：「では、みんなの生活の中でジャグリティが重要なのはどんなところですか？」

生 徒E：「私たちが物乞いや靴磨きをしていると、警察につかまってしまうことがあります。そんなとき、その子を助け出してくれるのは学校だけです。貧しい人々が公立の病院に診てもらいにいっても、長い行列に並んで待たされるだけで、いい薬がもらえません。でも今では、私たちの学校が病院に連れていってくれます。」

先 生：「では、このことから何を学びましたか？」

生 徒E：「この学校の役割は、私たちだけのためにあるのではありません。」

私たちが受けた教育をスラムに住んでいる他の貧しい人たちと分かち合うことが大切だと思います。」

ジャグリティでは、以上のような問答が授業のあらゆる場面で見られる。特にシャブナム・ラマスワミ氏のクラスではこうしたディスカッションが盛んに行われ、子どもたちは問答や討論を通して自らの社会や自分たちが置かれている状況に対する理解を深めていく。

教科書のある絵をきっかけに問答が始まることもある。例えば、教科書にリンゴの絵が載せられているとする（ジャグリティの授業では市販の教科書を使っている）。一般には、リンゴの絵を通して「リンゴ」という文字やリンゴをめぐるストーリーについて生徒たちは学ぶところであるが、ジャグリティの子どもたちは、誰ひとりとして教科書に載せられているような綺麗なリンゴを食べたことがない。そこで「どうして私たちが手に取るのは絵のようなリンゴとは違う、腐ったリンゴなのか」という教師の問いかけが生まれる。この問いをもとに、自分たちの置かれた社会環境やインド社会の不平等性などに関するディスカッションが始まる。ラマスワミ氏は、「そういうふうに生まれついた」からといって腐ったリンゴを食べるわけではないということ、そして自分たちの運命は変えられるのだということ子どもたちに教えたいという（NFUAJ 1993：30）。

こうした授業風景は、一見、イデオロギー色の強いものに思われるかもしれない。しかし、ラマスワミ氏は「子どもたちは、政治的な文脈で、自分たちはどういう存在であるのかということ学ぶ必要がある」、「子どもたちが身のまわりの世界を正しく認識できてはじめて、こうした本（一般の教科書）に意味を見出せる」という（前掲書、同頁）。ポン引きとして働かされたり、児童買春の対象としてもあそばされたりする子どもたち、すなわち生き残るために命をかけて働く子どもたち（サバイバーズ）が、自己防衛できるようになるための不可欠な営みとして問答形式の授業は位置づけられているのである。

6. 方法としての演劇——ドラマを通じた意識化のプロセス

ジャグリティの演劇教育においても、日常生活の諸問題について子どもたちと考え、話し合い、子どもたちが自立していくのに必要な精神的基盤の形成が目指されている。上級生は、教師の指導のもとにワークショップに参加し、ストリート・シアターを行う。そうすることによって、自分たちの身のまわりの問題について考えるようになる。つまり、題材を決め、劇を創作し、自ら演じることによって、自分たちが暮らす社会全体がどのような世界であるのかをまず認識し、その上でその現実世界との関わり方を考え、表現し、世界に対する認識と同時に、自己認識をも深めてゆくというプロセスを子どもたちは体験するのである。

演劇の題材は子どもたちの身のまわりの出来事となる場合が多い。ここに具体例をひとつ紹介したい。学校が設立されて数年後、スラムの住民を牛耳るマフィアがジャグリティの活動を住民を覚醒するものとして危険視し、学舎に放火し、教室棟が半焼した。当時は、警察の手助けなどとてもあてにできる状態でなかったため、自分たち自身でマフィアから受けた被害について世間に訴えなくてはならなかった。そこでSSIは、この事件を劇の題材に選び、文字どおりストリートでマフィアの行為の非人道性や滑稽さ、自分たちの身に降りかかった不条理を市民に訴えかけたのである¹³。

劇の題材は、身のまわりの問題からインド社会全体がかかえる問題にまで及ぶ。1992年末、インド北部のアヨディアにおけるヒンドゥー教徒のモスク（イスラム寺院）破壊事件に端を発し、宗教暴動がインド各地に飛び火しようとしていた最中、ジャグリティの子どもたちは、宗教対立という国家的な問題に自分たちがどう関わっているのか、ということ表現した劇を大学のキャンパスで演じたこともある¹⁴。

こうした教育活動を通して、子どもたちが学んだことは何であろう。この

¹³ 結局、この事件は元ジャーナリストであるジュグヌー・ラマスワミ氏がメディア・ネットワークを駆使し、マフィア側に謝罪させるに至った。

点について次に考えてみたい。

7. 目的としての共生へ

先に紹介した問答の終わりのところに、「この学校で何を学んだのか」という教師の問いに対して、「私たちが受けた教育をスラムに住んでいる他の貧しい人たちと分かち合うことが大切だと思います」という生徒の発言がみられる。この箇所について言及し、ラマスワミ氏は、自分のキャリアをつかむとか、昇進するというように、教育がひとつの手段として自分の生活をよくするだけのものに終始するのであれば、教育の本当の目的を忘れてしまったことになる（日本ユネスコ協会連盟1995：43、傍点筆者）、と述べている。では、ここでいう「教育の本当の目的」とは何を意味するのであろうか。いま一度、ラマスワミ氏の言葉に耳を傾けてみたい。

私どもの学校では、生徒たちは（教育を受けた以上）もっと責任がある。教育は、今いる状況から逃げ出すためのものではないのだということを教えます。（中略）ある意味で、今や彼らは新たなエリートなのです。寺子屋に来る機会を得ることができたからです。しかしながら、他にも学校にすらこられない子どもがたくさんいるということを忘れてはいけません。今度はそうした子どもたち自身が、新しい先生にならなくてはなりません。私はこのことはとても大切だと思います。ここから共生という考え方、相互理解という考え方に行き着きます（前掲書：同頁）。

ラマスワミ氏は、かつて貧困という「今いる状況」から「逃げ出す」こと

¹⁴ ラマスワミ夫妻自身、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の夫婦である。アヨーディアでの事件が勃発し、全国各地に飛び火した当時、異教徒同士結婚している夫妻の自宅にも嫌がらせがあった。そして子どもたちがこのことをも題材にし、「僕らの戦いは宗教をめぐる戦いではなく、この腹の中、つまり空腹との戦いなんだ」と訴えたという。

を夢見て都会にやってきた親の子どもやストリート・チルドレンに向かって、ジャグリティでの教育は貧困からの逃避のためではない、と説く。さらに、スラムの学校で教育を享受した時点で彼（女）らは「エリート」なのであり、すでに他者に対する責任を負っているということ、そして同じ境遇を共有する他者と関わりながら生きていくことの重要性、すなわち他者との分かち合いの大切さを主張する。

実際、SSIの職員の中には、ジャグリティの教育活動に感化され、かつてのストリート・チルドレンが「エリート」のひとりとして、子どもたちと暮らしを共にしている者もいる。一昔前までストリート・チルドレンであった4人のスタッフが家族のいない子どもの親代わり、ウサギの世話、毎日300人を越えた生徒の食事の支度などを行っているのである¹⁵。ラマスワミ氏は、SSIのプロジェクトが持続的に自己生成していくためには、ストリート・チルドレンの中からプロジェクトを支える職員を見つけることが重要であり、このことが希望につながると語る（NFUAJ 1993：18）。

識字を道具と見なし、問答や演劇を一方法ととらえたジャグリティ教育の目標は、ラマスワミ氏のいうところの「連帯」、もしくは、実際ラマスワミ氏自身が訪日中たびたび使用していた日本語である「共生」といってもよいであろう。ただし、氏のいうところの共生は、行動を伴わない同情心（なさけ）とは相容れないものである。ラマスワミ氏は、この点についても「映画（ジャグリティのビデオ）をお見せして、可愛そうだという気持ちにさせるのはたやすいことです。しかし同情からは本当の共生、本当の相互理解は生まれてきません。なぜなら、可愛そうに思うことには人間はたやすく辟易してしまふからです」（日本ユネスコ協会連盟1995：43）というように、注意を喚起することを忘れない。

¹⁵ ジャグリティのソーシャルワーカーたちの実際の活動ぶりについては『私たちの生活・私たちの学校』を参照されたい。

むすびにかえて

SSIは日本をはじめとする海外からの支援を受けている団体であるが、援助側から受益者側への一方的な関係には満足しない。ラマスワミ氏は「援助する側」に立つドナーに対しても決してひるむことなく「本当の共生、本当の相互理解」を求める。氏は、「共生をめざす市民のつどい」で次のように述べている。

日本人ひとりの少額の寄付が他国の人々が直面している問題を解決するのに役立っていると思ひこむことは、大変心地よいことである一方で、みなさんの身の周りや社会で起きている差別や不平等に反対していく責任が、みなさんにはあるということを受け入れるのは非常に難しいことです。しかし、このようなことに気がついて初めて、金銭的な寄付だけで解決できることは非常に少なく、今日世界が直面している重大な危機は、先進国と発展途上国の双方の緊急な対処を必要としているということ認識する事ができるのです。これは真の国際理解への鍵と言えるでしょう（日本ユネスコ協会連盟1995：83）。

このようにラマスワミ氏は、ドナーである私たち日本人に対しても齒に衣着せぬ表現をもって対等な相互理解の関係の樹立を訴える。上の氏の言葉に対して、正面から答えを返すことができる人は私たちの中にどれだけいるだろうか。金銭的支援を通じた海外援助／国際協力が、自分の身の周りの問題解決にコミットすることからの逃げ口上になっている場合は少なくないのではないだろうか。

ラマスワミ氏が強調するように、実際、「金銭的な寄付だけで解決できることは非常に少ないのかもしれない。たしかに、財政支援は重要な国際貢献であるが、それは「共生」への十分条件ではない。ラマスワミ氏のいうところの「共生」を国際社会で成立させる必須の条件は、ただ、日々の生活を

命がけで生き抜く自分たちに共感し、問題解決の一助となるために行動している人々が国外に存在するという事実なのである。ジャグリティの子どもたちやSSIのスタッフを勇気づけているのは、こうした「心の支援」であるといえよう。

このようなあまりにも当たり前のことを、南北関係を支配する社会システムの中に身を置く私たちはとかく忘れてしまう。文字どおり命がけの教育実践から生成されたラマスワミ氏の言葉は、スラムの教育実践をどこか遠い所の物語として聴きながら先進国で暮らす私たちの生活態度を逆照しているのである。

参考・引用文献

- 「ストップ子ども買春」の会編（1996年）『アジアの蝕まれる子ども』明石書店
- 曹洞宗ボランティア会発行（1987年）『アジアにかかる虹——スラムのともしび・プラティーブ先生』勁草書房
- 日本ユネスコ協会連盟（1995年）「ユネスコ創設50周年記念事業報告書『識字活動の仲間たちとの出会い：共に学び、生きる喜びをわかちあおう～寺子屋から世界がみえる～』」
- 萩原康生編著（1996年）『アジアの子どもと女性の社会学』明石書店
- M・R・P・バレスカス（1997[1991]年）『フィリピンの子どもたちはなぜ働くのか』明石書店
- マリー＝フランツ・ボッツ（1997年）『子どものねだん：バンコク児童売春地獄の四年間』社会評論社
- P・フレイレ／小沢有作他訳（1979年）『被抑圧者の教育学』亜紀書房
- ピーター・リーライト（1996[1995]年）『子どもを喰う世界』晶文社
- ロバート・チェンバース／穂積智夫・甲斐田万智子監訳（1995年）『第三世

界の農村開発』明石書店

Irving Epstein, (1996) 'Educating Street Children: some cross-cultural perspectives,' *Comparative Education*, Vol. 32, No. 3

NFUAJ (National Federation of UNESCO Associations in Japan) (1993) *The Second Workshop for the Promotion and Development of the UNESCO Co-Action Learning Centre Programme-Final Report*

Street Survivors India—A Profile (SSIの活動の概略を述べた、SSI作成のパンフレット)

スラメット・ラハルジョ・ジャロット監督映画『青空がぼくの家』(1989年)

ミーラ・ナイール監督映画『サラーム・ボンベイ』(1988年) (Nair, Mira, dir. *Salaam Bombay!* Film Four International. 116 min.)

日本ユネスコ協会連盟制作ビデオ『私たちの生活・私たちの学校』インド編、1995年、29分

**Jagriti — A School in a Slum:
from 'Education for Literacy' to 'Education for Sharing'
(English Résumé)**

Yoshiyuki Nagata

One of the key educational issues in developing countries is that there are many children who cannot attend school. A major reason for this is considered to be a vicious circle stemming from poverty; that is, children in poor families have to work on the streets, which leads to no education and illiteracy, which then leads to few guaranteed jobs and low wages, which finally leads to a life in poverty and to raising children in a similar context.

There are organizations which have made continuous effort to break this vicious circle and liberate street children and their families living in slum areas (shanties) by providing them with education. One such organization is Street Survivors India (SSI), and the school they run in an overflowing shanty near Delhi Station is called 'Jagriti', which means 'The Awakening' in Hindi.

Ms. Shabnam Ramaswamy, one of the co-founders of SSI, started her educational activities teaching street children on a platform at Delhi Station. Then, in 1990, SSI found a small site for their activities in a large slum community called Motia Khan in Central Delhi. They built a low-cost school hut with wooden poles and bamboo frames, and enrolled the first twenty-five students through a door-to-door survey. Approximately three hundred children are now enrolled in Jagriti, and the school manages seven classes. In each class, SSI teaches literacy (basic Hindi language) and numeracy as well as lessons fostering social awareness, drama, and other subjects.

Since Jagriti functions as an alternative form of education for street children who are unable to enjoy the benefits of the formal education system, it differs from public/state schools in many ways. Jagriti's "personalized and non-formal teaching methods" help the children overcome their handicaps related to access to education. For instance, SSI allows female students to bring in younger brothers or sisters while their mothers go off to work because SSI knows that in shanties even small girls are expected to play roles of mothers at home. Also, in contrast to the formal schooling system, children do not have to buy school goods such as pencils, notebooks and uniforms. Furthermore, contrary to the regulations of formal schools, Jagriti allows children to work for their families' income, so long as they are provided with mental and physical security. Jagriti also offers not only school lunch and medical care but also night shelters for those who have no house to stay nearby.

One of the philosophical features of Jagriti is reflected in its pedagogical methodology. Jagriti considers literacy and social awareness to be no more than tools for educating children, although the school's founders suppose that these factors are the most important elements in education. Concerning literacy, another co-founder of SSI, Mr. Jugnu Ramaswamy, insists that it alone neither automatically guarantees a better quality of life, nor does it automatically help learners to understand and fight inequality and exploitation within their society. Therefore he believes that literacy is not a substitute for education. He warns us that if we mistakenly assume literacy per se to be our goal, we fail in our duty as educators.

Here a question arises: if literacy is not a goal but a tool of Jagriti's education, then what is SSI's goal? On this point, Mr. and Mrs. Ramaswamy stress firstly the importance of "awakening" in education; in Freireian terms, "the awareness of oneself in the real world". At Jagriti, the learning and teaching process brings about self-knowledge and knowledge of one's culture, society and

politics. In dialogues, students deal with actual problems which they themselves or their society faces. Through the interactive process in the classroom, street children come to realize why they have to lead such a hard life and what they might do to change this in the future. Also, when performing street theatre, children express their feelings about the realities in daily life, including their own messages on social problems such as racial issues, etc.

Making the most of these pedagogical methods, children at Jagriti learn the importance of living with and for others. Actually, several of the youths who had been street children and have now graduated from Jagriti are working to help younger children at the school. Thus, the ultimate objective of Jagriti's education is sharing with and caring for others and trying to solve others' problems in order to build a better world.

The last but perhaps not the least important lesson one can learn from Jagriti and Mr. and Ms. Ramaswamy's theory and practice is how to establish relationships between the "haves" and the "have-nots". SSI owes much of their funds to people from Japan. With regard to this fact, Mr. Ramaswamy states that an ideal relationship with donors is not a mere give-and-take relationship but "true mutual understanding". When assisting developing countries, we tend to establish one-way relationships from the North to the South. Mr. Ramaswamy's statement offers us an opportunity to reconsider our own attitudes towards aid or assistance to the underprivileged.